

植生調査結果を活かした草地更新



せっかく草地更新したのに失敗して、牧草の播き直しや餌不足が発生してしまう事例を見かけます。植生改善の取り組みでは、始めに植生調査を行うケースが一般的です。植生調査結果から、侵入・優占した雑草の種類に合わせた植生改善・草地更新が必要です。

1. 優占雑草が《シバムギ》の場合



- (1) 完全枯殺には前植生に2回の除草剤処理が必要
- (2) 秋の播種(限界)時期から「2回の除草剤処理・再生期間・最終の牧草収穫」の作業時期を逆算・計画する

シバムギは、地下茎の量が多く、長く、再生する節の間隔が短いことから、1回の除草剤(グリホサート)処理で完全に枯殺することは非常に難しい雑草種です。写真A・Bの状態、牧草を播種すると、数年でシバムギ優占草地に戻ります。写真Cのように完全に枯殺する必要があります。

2回の除草剤処理を行い、播種限界時期までに牧草の播種作業を終わらせるためには、以下のように逆算の計画が必要です。

8月下旬～9月上旬に播種 ← 8月中旬に2回目の除草剤 ← 7月末～8月上旬に1回目の除草剤 ← 刈り取り後 30cm 程度の再生(20日) ← 最終刈り取り(7月上旬)

2回の除草剤処理を行う行程で、秋までに牧草播種を行う場合は、2番草を収穫できない想定が必要です。

2番草を8月中下旬に収穫した場合は、同様の行程では、9月下旬～10月上旬の牧草播種になり、越冬不良による草地更新失敗のリスクが高まります。



写真 1回の除草剤処理で不十分な枯殺(A・B)と完全に枯殺した状態(C)

2. 優占雑草が《リードカナリーグラス》の場合



- (1) 防除には前植生と実生(種からの発生)に2回の除草剤処理が必要
- (2) 秋の播種(限界)時期から、「実生への除草剤処理・実生発生期間・前植生枯殺期間・前植生への除草剤処理・再生期間・最終の牧草収穫の作業時期」を逆算・計画する

リードカナリーグラスは、地下茎の枯殺が必要ですが、同時に埋土種子からの発芽が強く懸念される雑草です。したがって、前植生への除草剤処理と、発芽した実生リードカナリーグラス個体への除草剤処理の2回処理が必要です。

播種限界時期までに牧草の播種作業を終わらせるためには、以下のように逆算の計画が必要です。



写真 リードカナリーグラスの埋土種子から発芽した個体

8月下旬～9月上旬に実生雑草除草剤処理と牧草播種 ← 雑草発芽期間(30日) ← 7月末～8月上旬に播種床造成 ← 7月中旬に前植生に除草剤処理 ← 刈り取り後 30cm 程度の再生(14日) ← 最終刈り取り(7月上旬)

2回の除草剤処理を行う行程で、秋までに牧草播種を行う場合は、1番草後の再生から作業を始めるか、極めて早い刈り取りでリードカナリーグラスの2番草を収穫する必要があります。

泥炭土壌ではグリホサート系除草剤が土壌中で分解されずに長期残存することから、播種床処理はお勧めできません。また、軟弱な地盤をリードカナリーグラスの地下茎が支えているというケースも少なくありません。このような草地ではリードカナリーグラスをうまく利用していく必要があります。



3. ギシギシの大きな経年株がある程度の割合で侵入している場合

植生調査で、前植生にギシギシの経年株がある程度の割合を占めた場合は、草地更新をすると、ほぼ確実に大量の実生（種からの発生）ギシギシが発生します。この膨大な個体を、個体が小さなうちに（空間を優先して大きな裸地を作る前に）防除することが必要です。

実生のギシギシを防除するには、



- (1) クローバを導入していない、夏～秋播種の新播草地に、播種後 40 日後にハーモニー1g/10a を散布
- (2) リードカナリーグラス優占草地と同様に、播種床にグリホサート処理して、夏～秋に牧草播種する
- (3) 春の牧草播種において、実生のギシギシを対処するには、播種床へのグリホサート処理後に牧草播種する。ただし、干ばつのリスクが伴う
- (4) 春の牧草播種において、播種床へのグリホサート処理以外に、実生のギシギシを防除するのは、極めて難しい
- (5) 実生の防除で残ったギシギシ株は、クローバを導入していない場合は、1 番草収穫後または秋にハーモニー処理。クローバが導入されている場合は、秋または翌春にアージランを用いて防除する
- (6) 大きな裸地には、作溝法等で牧草を播種して裸地を埋める



写真 ギシギシの実生が一斉に出芽した播種床



写真 裸地からは大量のギシギシが種から発生

